円くまあるく春の補修の成りたれば巣は茱萸しろき花に隠るる　住正代

主役は鳥と鳥の巣。春のはじめからこれまで、せっせと補修につとめていた巣が完成した。その巣を覆うグミの白い花。鳥が働いた春の初めから開花までの時間が、さり気なくクローズアップされている。

虱つぶしに調べておけと言ひ足しぬ虱のことを知らぬ生徒に　辻尾修

たぶん、作者も虱を知らないのだと思う。知らない者から知らない者へ。不思議な可笑しさが楽しい。私も、じつは、じっさいの虱をしらない。生徒たちと同じように、私も虱の出てくる慣用句を見ても、ぴんと来ない。

虱の出る慣用句は多い。中国から来たものもかなりある。かつて、蚤や蚊とともに、どこにでもたくさんいたから実感があったのだろう。「虱に故郷なし」（虱は人から人に移り住み故郷がない）、「虱の親も親」（つまらぬ者でも親は親）、「虱の花見」（花見の時分に繁殖し、襟や袖に花片のように出てくる虱）、「虱は大名」（虱は蚤と違って、人にたかっても動き回らず、おっとりしている）。まだまだある。「虱の皮を槍で剥ぐ」「口中の虱」「虱の皮を千枚剥ぐ」……等々。

キャサリンと名付けられたる猫の子がもうキャサリンの顔して眠る　新留紀代美

東京歌会で、近来にない高得点で共選一位になった作。分かりやすいし、まだまだ幼いらしい仔猫のすまし顔が、キャサリンという親しみやすい名前とともに、読者の目にうかぶ。人気は当然だろう。

自我と世界に揺れながら南国の蝶園をいまわれは歩めり　佐佐木頼綱

蝶園はバタフライファーム、蝶の動物園と思えばいい。自我の輪郭はどうなっているのか、外界と溶け合っているのか、厳然と区切られているのか……。蛹から蝶へ、完全変態を遂げる無数の蝶たちの中で、一生涯、一つの〈われ〉を生きる自分への問いかけ。そんな意味と想像するが、第一、二句は曖昧か。さらに七五五七七のリズムの不安定さが、あまり生きていないように思える。

「東海道五拾三次」三島まで来て休みたりソファーにひとり　経塚朋子

五十三次ではなく五拾三次と表記し、括弧をつけているのは、江戸期の浮世絵を意識しているからだ。だからこそ結句の「ソファーにひとり」に、読者は「えっ！」という思いを味わうことができる。

あてなくておぼつかなくもただよへる糸遊追へり穴師傍丘（かたをか）　勝島靖夫

古事記、万葉集にかかわる数々の伝承のある穴師（あなし）。その穴師周辺の古道をうたう。「糸遊（いとゆふ）」は陽炎。茫漠たる古代へ親近感を、そのまま茫漠たるイメージのなかに捉えようとする一首。上句、うまい。

窓閉めてカーテン閉めて半世紀建つ裏家の解体を聞く　花美月

閉めきって……聞く、という文脈が騒音のひどさ、音の大きさを読者に伝える工夫。日常生活のなかの小さな

短歌の現在

No.411　今月の15首を読む

佐佐木幸綱